

久留米城外郭遺跡

— 第17次発掘調査報告 —



平成23年（2011）10月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑後平野の中心に位置し、耳納山地の緑、筑後川の水など豊かな自然に恵まれています。このような環境のもと、先人達は多くの文化を創造し、市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。

今回調査を実施した久留米城外郭遺跡は、元和7（1621）年に有馬豊氏が久留米城に入城した際に造営されたもので、現在の久留米市中心部の形成に繋がるものです。今回は、久留米城外郭遺跡の南東隅にあたる部分を調査し、多くの成果を得ることができました。この発掘調査の成果が久留米の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして多大なご理解のもとにご協力を頂きました、株式会社鳩山企画代表取締役の鳩山エミリー氏や金子建設株式会社、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成23年10月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は店舗兼事務所建設に先立ち、平成22年度に株式会社鳩山企画代表取締役鳩山エミリー氏の委託を受けて実施した、久留米城外郭遺跡第17次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会の委任を受け、市民文化部文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・廣木 誠・田中樹子・楢原初美・藤木幸子・丸山幸・渡辺しげ子が行った。また本書に掲載した遺物実測、図面の浄書は、神保と非常勤職員の米澤美詠子が行った。
4. 遺構写真は神保が撮影した。また、遺物写真撮影は撮影機材トヨビュー45GⅡを使用し、カラーフィルムPROVIA100F（6×9判）を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて塚本映子が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SAー土塁、SDー溝・堀、SFー犬走り・道路遺構 SXーその他の遺構を示す。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号はLNGー017、調査番号は201021である。
9. 本書の執筆・編集は神保が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 久留米城外郭遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 小結	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、店舗兼事務所建設に伴う事前の発掘調査である。平成23年2月9日、株式会社鳩山企画代表取締役鳩山エミリー氏から、久留米市通町1-1、1-16における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城外郭遺跡に含まれており、平成8年度には東側隣接地について確認調査を実施していることから、照会地には埋蔵文化財の存在が有力であった。さらに久留米城に関する絵図によると、照会地は久留米城外郭の南東隅にあたり、照会地には久留米城を圍繞する土塁と外堀が存在することが確認された。そこで発掘調査が必要である旨を回答し、その後の協議の結果、杭打ちにより遺構が破壊される部分について調査費用を原因者負担とすることとなった。2月23日に「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成23年3月10日に株式会社鳩山企画代表取締役鳩山エミリー氏と久留米市長橋原利則は「久留米城外郭遺跡第17次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地の調査は平成23年3月14日から3月31日、報告書作成を含む委託契約期間は3月10日から10月31日である。

2. 調査の体制（平成23年度 報告書作成分）

調査委託：株式会社鳩山企画（代表取締役 鳩山エミリー）

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：立石雅文

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 古賀正美 園井正隆

課 主 査：白木 守 事務主査：近澤康治

庶務担当：豊福早苗

調査担当：神保公久 整理担当：米澤美詠子

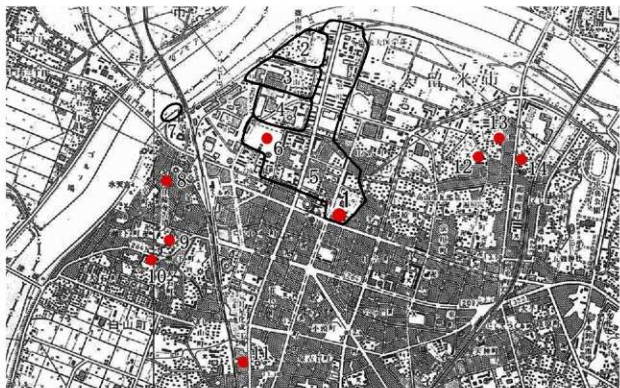
発掘調査整理臨時職員：森山優子

II. 久留米城外郭遺跡の立地と環境

久留米市は九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央部分に発達し、九州における交通の要衝である。筑後平野南端には耳納連山が連なり、その西端に延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。

久留米城は久留米市街地の北西部に位置し、筑後川左岸の標高10～13mを測る低台地上に立地する。外郭は、連郭式城郭である久留米城の本丸・二ノ丸・三ノ丸を東～南にかけて取り巻くように所在する。久留米城に関する調査では、弥生時代前期から古墳時代にかけての遺物が出土することがあり、第12・13次調査では甕棺墓群が検出されている。しかし、久留米城・城下の形成には相当な地形の変更が行われており、古代以前の様相は不明瞭な点が多い。

久留米城外郭は、久留米城の南～東側にかけて広がる上級武士の居住地で、平成22年度までに17次に及ぶ調査が実施されている。久留米城は明治7年に廃城となったが、その後の大規模工場の進出などでほとんどその景観を止めていない。今回のような久留米城に関する発掘調査は、失われた近世久留米城の景観を復元する責務を負ったもので、その成果の蓄積により、当時の町割りの復元などが徐々に解明されてきている。



第1図 久留米城外郭遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 久留米城外郭遺跡第17次調査地
2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城二ノ丸跡
4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭跡
6. 明善高校校庭遺跡
7. 梅林寺川底遺跡
8. 日輪寺古墳
9. 大石村館跡
10. 速水遺跡
11. 大隈村館跡
12. 東櫛原今寺遺跡
13. 石丸遺跡
14. 辻遺跡



第2図 久留米藩領図屏風（部分）と久留米城外郭遺跡第17次調査地

Ⅲ. 調査の記録

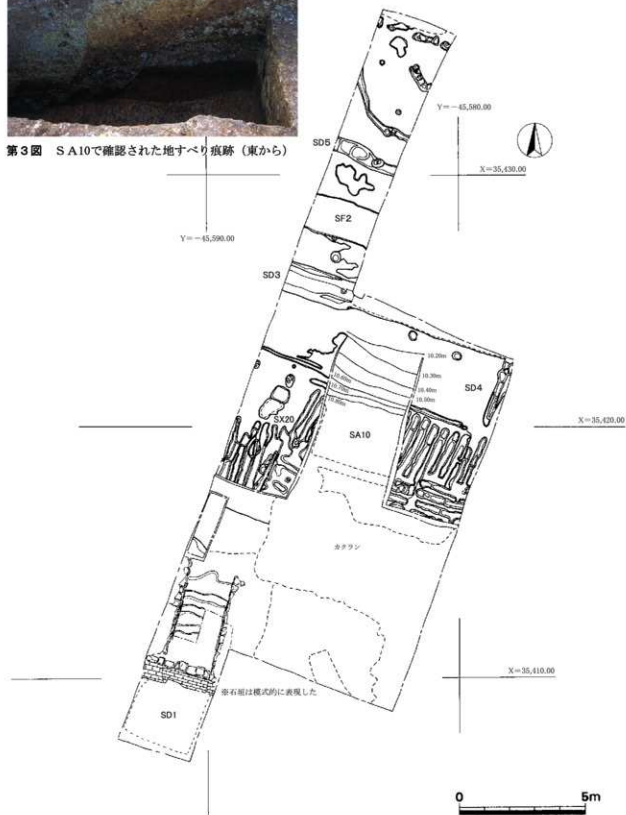
1. 調査の経過

久留米城外郭遺跡第17次調査は、久留米市通町1-1、1-16において実施した店舗兼事務所建設に先立つ事前の発掘調査である。前述したように調査対象地は久留米城外郭の南東部に位置し、周辺の確認調査の結果からも遺構の存在が確実視された。今回は店舗兼事務所建設予定地で、遺構の保存が困難な箇所について発掘調査を実施した。

平成23年3月14日にアスファルトカッターによって調査予定地のアスファルトを切断し、翌15日から重機により表土除去を実施した。16日の午前中まで表土除去を行い、同日より遺構検出を開始した。並行して平板測量による略図作成を行い、終了した場所から遺構の掘り下げを実施した。調査目的とした土塁と外堀は削平や攪乱を受けていたものの、検出することができている。遺構実測はトータルステーションを用いて行い、そのデータはCUBIC社製ソフト「遺構くんCubic」にて編集・保存している。全景写真はスカイマスターにより3月30日に撮影し、補足調査の後、3月31日に重機により調査区を埋め戻し、現地調査を終了した。整理作業は7月1日から10月31日まで筑後国府跡発掘調査事務所に実施した。遺構の記録写真は、神保がカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。



第3図 SA10で確認された地すべり痕跡（東から）



第4図 久留米城外郭遺跡第17次調査遺構配置図 (1/150)

2. 検出遺構

本調査地周辺の地形は、北から南へ若干傾斜しており、元来宅地であったものが近年は駐車場として利用されていた。調査地の基本土層は、アスファルト直下にバラスによる盛土が約0.2m程度確認でき、その下層には終戦後の整地が認められた。この整地層以下の遺構残存状況は比較的良好であり、地山検出面までの間に2～3面ほどの生活面が想定される。

今回、遺構を検出した地山面は褐色粘質土で、想定されていた外郭の土塁（SA10）と外堀（SD1）、土塁内側に存在した武家屋敷等の南面を区画すると想定される溝（SD3）と犬走り状の道路遺構（SF2）などを検出した。所属年代は、SA10が築造当初からの所産であるとすれば17世紀前半以降（後世の補修・改修の可能性あり）、武家屋敷の区画施設に関しては17世紀後半以降の所産と思われる。元来石垣が積まれていなかったとされる外堀には、城内側に石垣が積まれていることが確認されたが、この石垣は後述するように明治7年の廃城後と終戦後に築造されたものと判断される。また、遺構検出面までの深さは、調査区北壁付近で約0.8mを測る。以下、主要遺構の概要を述べる。

土塁

SA10（第5～9図）

調査区の中央部で検出した。北端は確認することができたが、南側は廃城後に築造された石垣や攪乱のために正確な端部の位置は確認できなかった。しかし基底部幅は約10mを測るものと推測される。高さは、平成8年度に実施された東側隣接地における確認調査の結果から、元来4～5m程度であったものと想定されるが、今回はアスファルト下に残存していた約0.8m分が確認



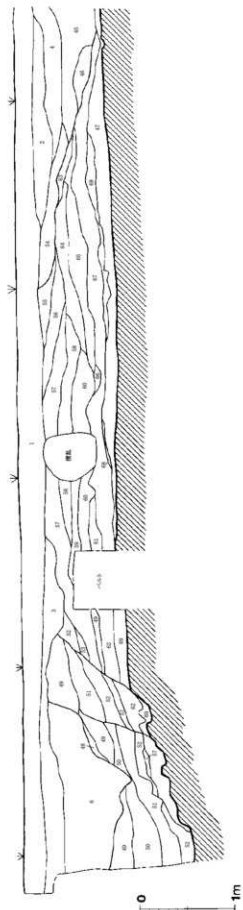
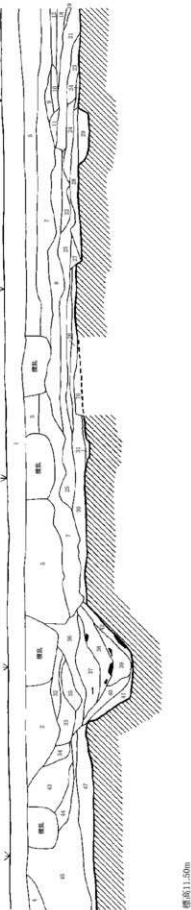
第5図 SA10全景（西から）



第6図 SA10積土状況（東から）



第7図 SA10基部の畝状痕跡（北から）



第8図 調査区西壁土層断面図 (1/40)

されたに過ぎない。土塁の積土は、版築状を呈さず、白色や黄白色のシルト質土で、褐色や黒褐色粘質土を含んでいる。西壁における土層観察では、北端に幅約3.5m、高さ約0.6mの土手状に土盛りをした後、その南側へ積土を施した可能性が考えられる。積土は精緻というより粗雑な印象を受けた。また、西壁に設定したトレンチの南端部分では、積土が地山ごと南西方向へ崩落した痕跡が確認された。地震等の災害に見舞われ、外堀の方向へ地す



第9図 SA10基底状況（東から）

べりを起こした可能性も想定される。最大で約0.35mの崩落が観察できた。一方、土塁の基底部では、地山面に畝状の掘り込み（SX20）が数条確認された。さらにその上面と積土の境界付近では黒色層が確認でき、植物質の炭化物も見受けられたため、一部に粗朶を敷いたものと考えられる。これらは土塁基部における地盤強化などを意図した一連の地業痕跡と判断される。

溝

SD1（第10～13図）

調査区の南部分で検出した。久留米城外郭の外堀にあたるものと考えられる。これまで存在が想定された箇所より若干北側で確認でき、内側法面には石垣が伴って検出された。久留米城の外堀は、元來石垣が積まれていなかったとされるため、検出された石垣は廃城後に積まれたものと想定されたが、この石垣は外堀の位置を踏襲して築造されたと考えられるため、今回検出した石垣から南側を外堀と判断したい。幅は現道下まで広がるものと思われ不明であった。深さも危険防止のため掘下げを実施していないために不明であるが、現地表から3m以上であることが確認できた。石垣は、廃城後の明治時代と終戦後の2時期に分けて築かれており、明治時代の築造時には階段式の出入り口が設けられている。出入り口部分は幅約1.8mで、北側から階段によって外堀がある南方面へ降りていく形態になっており、その両側は石垣が積まれている。その後、終戦後にはその場所を踏襲

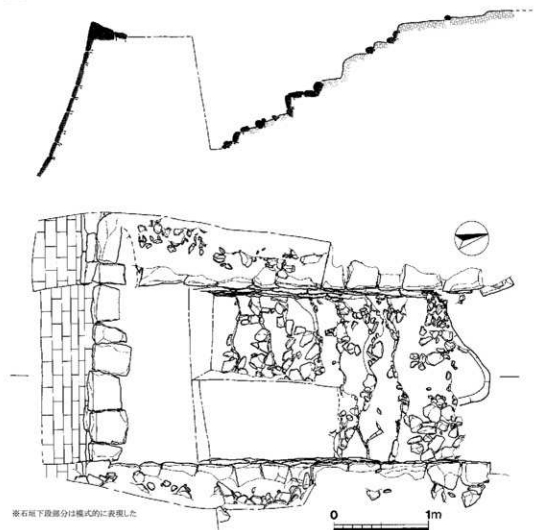


第10図 外堀内側の出入り口検出状況（東から）



第11図 外堀内側の石垣検出状況（南から）

標高10.60m



第12図 SD1 石垣・出入り口部分 実測図 (1/40)

して煉瓦製のアーチ橋が架けられている。このアーチ橋は明治期の出入りを石垣で塞いで築造した石垣に取り付くように架けられている。また、その裏込めに戦災による焼土が多量に使用されていたことから、戦後の所産と判明した。

SD3 (第14・15図)

調査区の中央部北よりで検出した東西走行の溝である。調査区幅の約10m分を検出した。上面幅約0.8m、底面幅約0.5mを測る。底面はほぼフラットで、断面逆台形を呈する。深さは0.4m程度であり、底面レベルは西側から東側に向かって低くなる。埋土は黒灰色系の砂質土で、



第13図 SD1と石垣、アーチ橋検出状況 (西から)



第14図 SD3土層堆積状況（東から）



第15図 SD3全景（西から）

礫や遺物を若干含んでいる。後述するSF2と方向性が一致し、その間は白色粘土が少量認められる箇所があり地山が硬化している状況が認められた。SD3の北側に土壁などが存在したものと思われ、後述するSF2が壁の北側の犬走りと考えられることができよう。すなわちSD3とSF2、その間の土壁が一連の区画施設として機能していた可能性が考えられる。埋土からは土師器小皿・土鍋の細片、近世磁器（碗・猪口・瓶）の細片、近世陶器（碗・すり鉢）の細片、瓦質土器羽釜の細片、瓦、天草砂岩片、土壁片などが出土している。

SD4

調査区の東壁沿いで検出した南北走行の溝である。南北長約3m、上面幅は約0.3mを測る。底面は凹凸が認められ、最深部では約0.2mを測る。重複関係から前述したSD3に先行するものと思われるが、SA10との前後関係は確認できなかった。SA1基底部の畝状の掘り込みの延長上に存在するため、その一部かとも思われたが、位置関係や遺構の深さから別遺構と判断した。埋土からは土師器小皿・土鍋の細片、近世陶器すり鉢の細片、瓦などが出土している。

SD5

調査区北壁から約5.5mで検出した。西壁から東壁にかけて検出したが、若干南側へ蛇行した状況を呈している。性格不明な溝である。最大上面幅約0.5m、底面幅約0.4mで、深さは約0.2mを測る。埋土は黒色土を呈しているが、出土遺物は皆無であった。

道路遺構

SF2（第16～18図）

調査区中央部からやや北側付近で検出した。前述したSD3の北側約1.5mに位置する。検出時は溝と思われたが、掘り下げを実施すると砂質土で非常に硬化しており、近世陶磁器や瓦などが敷き詰められた状況を呈していた。幅約1.7m



第16図 SF2付近検出状況（西から）



第17図 SF 2 付近全景（西から）



第18図 SF 2 遺物出土状況（東から）

程度である。検出した場所は、現存する絵図より想像すれば延宝八年久留米城下図における「吉田利兵衛」、天保年間久留米城下図においては「梶村」家の南面付近にあたることから、これらの屋敷を圍繞する南塀部分と判断されよう。前述したように、SF 2 の南側にはSD 3 が位置し、その間約1.5mには部分的に白色粘土が認められる硬化面が確認されている。この硬化部分には土塀などが存在したもののと思われ、SF 2 が大走りなどの性格を有する一連の区画施設として機能していた可能性が考えられる。土師器土鍋・甕の細片、須恵器壺の細片、近世陶器碗・すり鉢・鉢の細片、近世磁器碗・皿・瓶の細片、瓦などが出土している。中には17世紀後半の遺物も認められ、17世紀後半以降の所産と思われる。

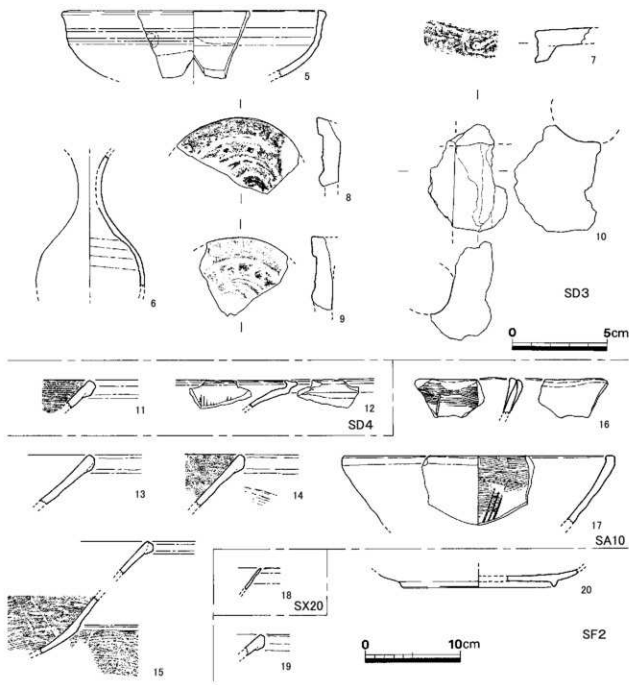
3. 出土遺物

調査対象地は外郭の南東部にあたるものの、調査区の大部分が土塁と外堀、後世の攪乱にあたり、生活の場ではないこともあってか出土遺物は少なかった。パンコンテナー1箱程度である。出土遺物には6世紀後半代の須恵器（坏身・甕）細片が少数混入しており、他は中世以降の土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石製品・ガラス製品などである。



第19図 久留米城外郭遺跡第17次調査出土遺物（写真①）

出土遺物の中では、土壘中やその基底部、溝などから土師器土鍋の出土が比較的多いことが目を引く。いずれも外面は煤が付着しており、実際に使用されたものと思われる。さらに土師器すり鉢の出土も多い。瓦はSF 2・SD 3から比較的多く出土しており、軒丸瓦が4点、軒平瓦が1点出土している。軒丸瓦は巴文のみで右巻きと左巻きがある。巴文は比較的小く、尾は2重になる箇所も認められる。珠文は小振りで間隔は広い。軒平瓦は唐草文のみであった。他の遺物についての詳細は、第1表を参照していただきたい。



第20図 久留米城外郭遺跡第17次調査出土遺物実測図 (10は1/2、他は1/4)

第1表 久留米城外郭遺跡第17次調査出土遺物観察表

遺物 No	出土遺 構	種 別	器形	法 量 (cm)			染付・釉薬 (色調)	装 飾・調 整			底面・高台 内印銘等	特 徴	製作地・胎土	年代・備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
1 第19図	SD 1	ガラス	瓶	2.6	6.3	24.0	緑青					「フナキラー」	昭和初期小	201021	000001
2 第19図	SD 1	ガラス	瓶	2.5	4.3	18.5	無色						昭和初期小	201021	000002
3 第19図	SD 1	ガラス	瓶	6.1	6.3	5.5	緑青						昭和初期小	201021	000003
4 第19図	SD 1	ガラス	瓶	4.8	4.3	5.0	緑青					磨製蓋付き	昭和初期小	201021	000004
5 第20-21図	SD 3	陶器	鉢	(28.0)	—	(7.0)	黒褐	回転ナデ	回転ナデ			体部下部は 露胎	焼良 (黒色粘土)	201021	000014
6 第19-20図	SD 3	磁器	瓶	(4.0)	—	(14.0)	染付	網目? 透?	回転ナデ					201021	000007
7 第20-21図	SD 3	瓦	軒平瓦	(6.0)	(10.0)	3.3		ナデ ケズリ	ナデ ケズリ				焼良 (雲母・角閃石)	201021	000012
8 第20-22図	SD 3	瓦	軒丸瓦	(7.3)	(12.0)	2.0		ナデ	ナデ				焼良 (雲母・ 角閃石・石英)	201021	000010
9 第20-22図	SD 3	瓦	軒丸瓦	(8.1)	(9.2)	2.2		ナデ ケズリ	ナデ ケズリ				焼良 (雲母・角閃石)	201021	000011
10 第20図	SD 3	土製品	土壁	(5.7)	(3.9)	(4.1)						木材の 交差部分		201021	000013
11 第20図	SD 4	土師器	土鍋	—	—	(3.0)	黒褐 浅黄褐色	ナデ	刷毛目			外面露付着	磨胎 (雲母・石英・輝石)	201021	000008
12 第20-21図	SD 4	陶器	すり鉢	—	—	(2.9)	灰白 オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ 刷毛目			口縁部のみ 露胎	焼良 (雲母・石英)	201021	000009
13 第20図	SA 10	土師器	土鍋	—	—	(5.3)	橙 褐灰	回転ナデ	刷毛目			外面露付着	磨胎 (雲母・石英・赤色粘土)	201021	000019
14 第20図	SA 10	土師器	土鍋	—	—	(5.6)	橙 黒褐	回転ナデ	刷毛目			口縁部の外面 露付着	磨胎 (石英・輝石)	201021	000016
15 第20図	SA 10	土師器	土鍋	—	—	(9.8)	黒・橙 黒褐	ナデ	ナデ・ケズリ 刷毛目			外面露付着	焼良 (雲母・石英・輝石)	201021	000015
16 第20-22図	SA 10	土師器	すり鉢	—	—	(4.2)	にぶい黄 にぶい橙	ナデ	ナデ・刷毛目 刷毛目				磨胎 (石英・輝石)	201021	000018
17 第20-22図	SA 10	土師器	すり鉢	(29.0)	—	(7.3)	灰黄褐 にぶい黄赤	ナデ	ナデ・刷毛目 刷毛目				砂粒・磨胎 (石英・雲母)	201021	000017
18 第20図	SX 20	土師器	碗	(9.0)	—	(2.4)	浅黄褐 灰白	回転ナデ	回転ナデ				焼良 (石英・輝石)	201021	000020
19 第20図	SF 2	土師器	土鍋	—	—	(2.3)	橙 黒・黒褐	ナデ	刷毛目			外面露付着	磨胎 (石英・輝石)	201021	000005
20 第20-22図	SF 2	磁器	皿	—	(16.0)	(1.9)	染付	圓線		草花文	「大」 針文え	肥前	17世紀後半	201021	000006

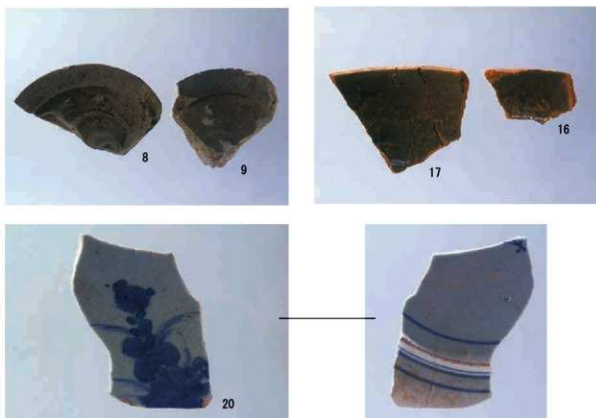
() 内の数値は現存または復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997年版)による。

登録番号は、久留米市市民文化財文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第21図 久留米城外郭遺跡第17次調査出土遺物(写真②)



第22図 久留米城外郭遺跡第17次調査出土遺物（写真③）

IV. 小 結

今回は、調査前に想定した通り久留米城外郭を囲繞する土塁と外堀、さらにその内部において武家屋敷等の南側を区画する施設を検出することができた。特に土塁の積土に関するデータが得られたことは大きな成果であった。ここでは今回の調査で得られた所見を述べておきたい。

●調査地付近の土地利用形態と梶村家について

久留米城に関する江戸期の絵図は、現在数種類伝わっているが、代表的な絵図として1680年の延寶図と天保年間図（1830～1844年）がある。他に元禄14（1701）年図や寛政8（1796）年図、嘉永年間（1848～1854）図、安政2（1855）年図などがあり、江戸期の久留米城と周辺の城下町について往時の様子を伝えている。今回の調査地は久留米城外郭の南東隅にあたり、西側には城内に通じる狩塚口が位置する。調査区付近は、延寶図・元禄図においては「吉田利兵衛」、寛政図では「御目付屋敷」、天保・嘉永・安政図では「梶村」「梶村槌太郎」の記載が見える箇所であろう。武家屋敷→藩施設→武家屋敷と利用形態が変化している事が伺える。S F 2等からなる区画施設は、絵図中に伺える土塁との位置関係や出土遺物から「吉田利兵衛」宅に伴うものである可能性が高い。一方、梶村家については、『久留米人物誌』（篠原正一、1981）によると梶村槌太郎の父、儀十郎は御馬廻役200石を拝しており、槌太郎は天保9（1839）年に砲術修行のために江戸に出府、弘化

2（1845）年には明善堂素読方となっている人物である。その子広人は久留米藩軍務官、孫達も軍籍にある人物が多い家柄であることが伺える。

●土塁と外堀について

久留米城の築造は、田中吉政が筑後国主になり、次男則政が久留米城主となった1600年頃に始まったとされる。次いで有馬豊氏が入城した元和7（1621）年以降に、久留米城の大改造と城下町の整備を始め、翌年頃には外郭などの縄張りは完成したと考えられている。「土居」と記載のある土塁についても、この頃に築造が開始されたと考えられようが、外堀の完成と土塁の完成時期については不詳である。今回の調査でも特定できなかった。特に外堀については、廃城後に築造された石垣などの攪乱により築造時期を推測できる遺物はなく、最終的な埋め戻しが戦後に下ることが判明したのみである。1874年に久留米城は廃城し、翌年に土塁の破却と堀の埋め戻しが始まるとされるが、調査地付近に関しては、外堀の痕跡が戦後まで残っていたことが確認できた。『目で見える久留米の歴史』（久留米市、1979）に昭和33年撮影の調査区付近の遠景が掲載されているが、今回検出した外堀とそこに架けられた橋（または通路）のようなものが写っている。払い下げられた外郭の跡地に存在した三島邸に出入りするための施設であろう。今回検出した石垣とステップを伴う通路、レンガ製のアーチ橋などはその一部であると思われる。

●外郭築造前の調査地の原風景について

前述した通り、今回の調査では土塁積土や基底部などから、比較的多くの土鍋やすり鉢などの調理具が出土した。古賀正美は『久留米城外郭 佐々木家屋敷跡』（久文報第96集）の「IV久留米城外郭地区の武家屋敷」において、元和7（1621）年以降に始まる有馬豊氏の久留米城と城下町の建設に伴い、外郭地区については祇園小路の住民が移転させられていることから、有馬氏以前の田中時代の城下町がこの地に存在していたと想定している。この町の起源は、平安後期の天慶年間（938～946年）に鎮座したと伝承のある祇園寺（現須佐能神社、久留米総鎮守）を核としたもので、中世久留米の中心の一つでもあることから、今回の土塁積土中や基底部から出土した多く調理具は、外郭建設以前にこの地で生活していた人々の証であるのかもしれない。

●地滑り痕跡について

本文中で述べたように、調査区西壁のトレンチにおいて、土塁積土が南西方向へ最大約0.35m程度地滑りを起こしている痕跡を確認した。土層観察では2箇所に及ぶ不整合面が認められ、崩落の大きさが伺える。久留米城に関する災害痕跡としては、平成22年度に実施された京隈侍屋敷遺跡第20次調査において、地下蔵形態の藩用のものと考えられる穴蔵が17世紀後半頃に壁が崩落し、埋没した痕跡が確認されている（未報告）。地震などの自然災害に見舞われた可能性が想定されている。今回の地滑り痕跡は出土遺物に恵まれなかったため断定はできないが、江戸期に20回程度起きたとされる地震などの自然災害によって生じた可能性も否定できない。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くろめじょうそとぐるわいせき だいしちじはのくつちやうきほうこく	
書 名	久留米城外郭遺跡 ー第17次発掘調査報告ー	
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第306集	
編 著 者 名	神保公久	
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課	
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp	
発行年月日	平成23(2011)年10月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
くろめじょうそとぐるわいせき 久留米城外郭遺跡 第17次調査	くろめし 久留米市 城南町 1-1、1-16	40203		33° 19′ 6″	130° 30′ 37″	20110314 ～20110331	195㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
久留米城外郭遺跡 第17次調査	城館跡	近世	土塁	1条	土師器、須恵器、近世 陶磁器、瓦、ガラス瓶		調査地は久留米城外郭の南東隅にあたる。調査では、外郭を圍繞する土塁と堀、屋敷などの区画施設などを確認した。また、土塁は地滑りを起こした痕跡が認められ、自然災害などに見舞われた可能性も考えられる。	
			溝	4条				
			道路遺構	1条				
要 約								
調査地は久留米城外郭の南東隅にあたる。調査では、外郭を圍繞する土塁と堀を確認し、明治時代の廃城後に設けられた石垣を検出した。この石垣は明治時代と戦後に設けられたことが確認でき、久留米城の外堀が戦後まで残存していたことが判明した。また、土塁内側においては、溝や土塁、大走り状の道路遺構によって区画された屋敷などの区画施設を確認している。一方、土塁には地滑りを起こした痕跡が認められ、自然災害などに見舞われた可能性も考えられる。								
土木工事の通知日		平成23年2月23日			遺物の発見通知日		平成23年3月31日 (22文財第1411号)	



久留米城外郭を囲繞する土塁の断面。地滑りの痕跡が確認された。



調査区から北東を望む。右奥の林は現存する久留米城外郭の土塁である。

久留米城外郭遺跡

—第17次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第306集

平成23年10月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社